

アメリカン・レコード・ガイド批評 2014年7・8月号 東京フィルハーモニー交響楽団

東京フィルハーモニー交響楽団は3月11日、アリス・タリー・ホールでの米国デビューを皮切りに、6都市を巡る創立100周年記念ワールド・ツアー2014を開始した。好評を博した本公演は、このメジャー・オーケストラの、長く延期されていたツアーの幕開けとなった。

なぜ、こんなに時間がかかったのか？ 2011年の100周年ツアーが3年延期されたことは容易に説明できる。ちょうど3年前、福島の大震災がニューヨーク公演の前日（訳注：当日の間違い）に起こったのだ。しかし、華やかなガラ公演のプログラム冊子に掲載された年表には、激動の1世紀の間、ほぼ外国作品の演奏に専念してきた楽団にとって基金集めや維持、ましてや国際的なマーケティングがいかに大変であったかが示されている。

名古屋の呉服店の「少年音楽隊」として創設され、退役軍楽隊長に率いられた音楽隊は名古屋交響楽団と名称を変え、1938年に東京へ移る。戦争やその後の経済的不安定などの社会背景によって、楽団の苦労はますます大きくなっていき、国際的な地位を初めて大きく向上させたのは、50日間のヨーロッパ・ツアーに出た1984年のことである。

2010年より常任指揮者を務めるダン・エッティンガーは、音楽監督を務めるマンハイム国民劇場のスケジュールが埋まっていたため、米国で学んだ大植英次が3つのプログラムで9日間（訳注：実際は16日）6都市のツアーを率いた。ミネソタ、バルセロナ、ハノーファー（ここでは今も指導を続けている）で音楽監督を務めるなど、欧米で幅広い経験を積んだ日本人としてキビキビと華やかな存在感をみせ、ツアーのよき表看板となった。

黛敏郎「BUGAKU」は、ジョージ・バランシンが1962年にニューヨーク・シティ・バレエのために委嘱した2部構成のバレエ。雅楽（日本皇室の古典音楽）の舞踊部分を連想させ、柔らかに這うような弦に始まり、管と打楽器に彩られた堂々たる行進へと進み、最後は神々しく輝く弦で終わる。第2楽章はソロ・ピッコロの軽快なテーマにふちどられ、より気ままに不吉であり、「春の祭典」を思わせる攻撃的に押し進むモチーフを持つ。20分の作品は、最初のテーマから取られた壮大なコーダで終わり、オーケストラの強健で緊密な音と、首席奏者たちの自信に満ちたヴィルトゥオージティを示した。大植は派手な身振りで音楽を形づくり、クリーンでパワフルな演奏へと導いた。問題点は、タリー・ホールがこの大規模な音楽には小さすぎ、残響がありすぎたこと。この点は公演中一貫した事実で、ステージ近くの聴衆は堪え難かったに違いない。

小山清茂「木挽歌」（1967年）では、ラヴェルとコープランドの現代的調性を思わせる4つの民謡を聞かせた。打楽器とピッコロがピッチ・ベンディングを多用したゆったりとしたペースの即興的フレーズで民俗楽器を模倣し、オーケストラ全体のリフレインと交互にあらわれる。色彩豊かなオーケストレーションと乗りのよいシンクペーションにより、この曲は大いに聴衆の感興をよんだ。

「春の祭典」での大植の指揮スタイルは実に肉体的で、コンサートマスターと共に踊っていたと言っても過言ではない。指揮棒で空を突き、儀式的な舞踊を体現していた。ストラヴィンスキーの断続的なユニゾンでは、突き動かされたというよりは勤勉な感があったが、全体的には力強く堂々たる「春祭」であり、最高の演奏のひとつにランクづけられる。個人的には、この異教徒の音楽モニュメントではより生々しい音が好みだが、東京フィルハーモニーは力と、正確さと、切迫感を奮い起こしてホールを揺るがした。

アンコールでは、大植がお祭り騒ぎの舞台へと解き放たれた。華やかなオーケストレーションのアーヴィング・バーリン・メドレーの最後に、アメリカ国旗を指揮台にかけ、聴衆に、立ち上がって「ゴッド・ブレス・アメリカ」を一緒に歌うようにジェスチャー。そして星条旗を裏返すと、それを朝日で飾られた法被に仕立て、これを羽織って外山雄三「管弦楽のためのラプソディ」から熱のこもった「八木節」を指揮した。聴衆はいっせいに立ち上がって手拍子を送り、曲の最後にはそれが熱烈な喝采となって公演を華やかにしめくくった。祝福すべきニューヨーク・デビューであった。